

「母なる風土と生命をうたう」

津軽鉄道に初めて乗車した日、五所川原の古い駅舎に1枚の色紙が飾られてあった。

かざぐるま光を紡ぎ廻る子よ 千空

「光を紡ぎ廻る子」という詩的な表現に惹かれ、「千空」という名前を初めて知った。30年ほど前、高校の教師をしていた頃のことだと思う。

平成9年、私が青森県近代文学館の勤務となった最初の年、初めて「成田千空」と出会った。7月5日、『萬緑』50周年を記念して建立された中村草田男の句碑「**玫瑰や今も沖には未来あり**」の除幕式が、文学館が所属する青森県立図書館の敷地内で行われた時のことである。千空の風貌と言動から、心身ともに「大きな人だ」という印象を受けた。そして、草田男が千空の生涯にわたる「文学の師」であることを知った。

平成18年、千空は体調がすぐれぬ中、私が担当した近代文学館の特別展「青森県近代俳句のあゆみ」で、図録の題字揮毫・巻頭言執筆、開会式出席、シンポジウム（出演：成田千空、辻桃子、藤木俱子、復本一郎）出演と、協力を惜しむことはな

かった。この時、千空が「母なる風土と生命をうたう」かけがえのない俳人であることを知った。そして、翌年に世を去るとは夢にも思わなかった。

凄まじき月光となる個室かな 千空

病室を訪ねた日、千空はベッドに身を横たえ背を向けたままの姿勢で手を差し伸べ、「大丈夫だね（大丈夫だよ）」と静かに言い私の手を握った。これが、千空を見た最後となった。

近代俳句の革新は、明治25年、正岡子規の「**瀬祭書屋俳話**」にはじまるとされる。「**瀬祭書屋俳話**」が掲載され、この運動の主舞台となった新聞『日本』の社主は、弘前市出身の陸羯南であった。そして、子規から新しい俳句を学び門下の俊英とされたのが、羯南と同郷の佐藤紅緑である。当館の常設展示は羯南と紅緑から始まる。近代の「**俳句革新**」の志は明治から大正、昭和へと受け継がれ、草田男と千空もその脈々たる流れの中にある。弘前で千空展を開催する意義の一つがここにある。

（企画研究専門官 櫛引洋一）



第45回企画展

生誕100年 成田千空展

「東北に千空あり」とうたわれた俳人の生涯と作品
太宰治、寺山修司／中村草田男、金子兜太との出会い



開催初日の様子

成田千空は大正10年に青森市で生まれた。県立青森工業学校を卒業後、東京の富士航空計器に入社するが、昭和16年に肺疾により帰郷、その後4年間に及ぶ療養生活のなかで句作を始めた。俳人・中村草田男の「人生と文学を探求する俳句」に強い関心と希望を抱き、草田男を「学ぶべき文学の師」と定めた千空は、津軽の風土と人間性を作品に打ち出し、独自の俳句文学を模索。東北の小都市・五所川原で俳句を愛し続け、86歳で没するまでその人生を貫いたのである。

開会式では、『成田千空伝－大粒の雨降る青田母のくに－』（青森文芸出版・平成31年3月31日）の著者である元「俳人・成田千空研究会」調査研究員の齋藤美穂氏が、「千空には2つの誕生日があり、本来の誕生日の4月1日、そして学問が好きであった千空の父が、一日でも早く入学させたいと願って届を出した3月31日で、この二日間にゆかりの地、五所川原と弘前で記念事業の開催をみたことは大変よろこばしいこと、そして、弘前で「生誕100年 成田千空展」開催を〈ひとつ先のステージ〉に至ったものと注目している」と述べた。



齋藤美穂氏

…昨日は五所川原で千空記念事業がスタートしました。会場は津軽鉄道と観光施設の立佞武多の館です。この事業は、昨年の春に弘前で計画があると伺い、永住の地・五所川原でも千空を知らない市民のために何か催したいと準備を始めたという経緯がございます。…千空は戦争への内省から、人間らしく生きるというただ一点のみを句作の動機としました。風土に根差した作風についても、そこから考えていくとわかりやすいのではないかと感じています。俳人としての輝かしい業績、例えば俳人協会賞、蛇笏賞、詩歌文学館賞などの受賞を顕彰の価値とみるのではなく、俳人の枠を超えて地域文化の振興に果たした役割について見直していきたいと考えています。… 第45回企画展「生誕100年 成田千空展」開会式あいさつより（令和3年4月1日 齋藤美穂）

▶ 今後の文学忌 ()はロビー展示期間

- 太宰治 6月19日(6月18日～24日)
- 葛西善蔵 7月23日(7月23日～29日)
- 陸羯南 9月2日(9月1日～7日)
- 一戸謙三 10月1日(9月25日～10月1日)

※忌日は無料開館となります。

※ロビー展示は1階ロビーにて行います。

▶ 企画展記念講演会のお知らせ

- 演題 「成田千空－風土を超えるもの」
- 講師 横澤 放川氏(俳句結社「森の座」代表)
- 日時 令和3年8月21日 午後2時～3時
- 会場 弘前市立観光館 多目的ホール

※申込受付は開催日の1か月前より開始します。

※日程・会場等に変更になる場合があります。

お申し込み、問い合わせは文学館窓口、またはお電話 0172-37-5505 まで

◇スポット企画展 中央俳壇と津軽の俳人(一) 現在開催中

会期: 令和 3 年 4 月 17 日~6 月 24 日

明治から昭和にかけて、俳句の革新に挑んだ正岡子規、河東碧梧桐、荻原井泉水。彼らの影響を受けて変貌する津軽の俳人たちをテーマに紹介している。

1. 子規と紅緑

明治 25 年、新聞『日本』に「瀬瀬書屋俳話」を掲載して俳句の革新に乗り出した正岡子規と、子規から俳句を学び本県に新派俳句の種を蒔いた佐藤紅緑を中心に紹介。展示資料は、日本派最初の総合句集『新俳句』(明治 31 年)、紅緑の初めての句集『俳諧 紅緑子』(明治 37 年)、紅緑直筆の短冊など。

2. 碧梧桐と山梔子

新傾向俳句を広めるための「三千里」の全国行脚で、明治 39 年から翌年にかけて来県した河東碧梧桐と、彼に師事した岩谷山梔子を紹介。展示資料は『山梔子第一句集』(大正 13 年)、山梔子の直筆短冊など。

3. 井泉水と弘前の俳人

自由律俳句を提唱して大正元年に弘前を訪れた荻原井泉水と、その影響を受けた俳人たちを紹介。展示資料は、成田夜雨宅での井泉水・桜碗子歓迎句会記録(複製)、『松木星陵遺句集』(昭和 4 年)、『抱甕子遺稿』(昭和 9 年)、『道常無名』(昭和 26 年) など。

※「中央俳壇と津軽の俳人(二)」は令和 3 年 6 月 26 日~9 月 20 日 で開催



日本派初の総合句集『新俳句』
民友社 明治 31 年 3 月 14 日



糸瓜忌に来て愧多き老となり
紅緑

佐藤紅緑短冊

◇スポット企画展 新収蔵資料展

会期: 令和 3 年 2 月 2 日~4 月 14 日

当館では例年新資料の収蔵・調査・研究に努めている。収蔵する資料は主に寄贈されたものと当館で購入したもの。今回のスポット企画展では、近年収蔵された資料から厳選し紹介した。

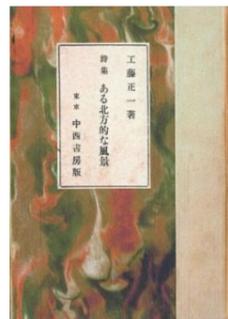
昨年 4 月に逝去された津島園子氏(太宰治・長女)より、園子氏と太宰治研究家の相馬正一氏、眼科医の平山四十三氏の三人で撮影された写真と、龍飛崎にある太宰治文学碑除幕式の集合写真などが寄贈された。平山四十三氏は今別町出身で、弘前で眼科医院を開業。旧制中学時に太宰と同じクラスとなり、トップの成績を競い合うほど成績優秀で真面目な人柄であったという。龍飛崎の文学碑建立に尽力するも道半ばで他界し、その遺志は遺族に引き継がれた。

石坂洋次郎のご遺族から寄贈された資料から、勲三等瑞宝章の勲章と勲記(賞状)、石坂の代表作 3 作のペーパーバック版を、石坂の功績を今に伝える貴重な資料として紹介した。

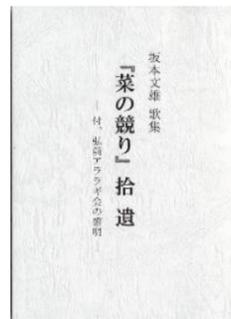
劇作家 演出家・小山内薫から歌人・川田順に宛てた書簡は学生時代に書かれたと思われ、二人の青春時代が垣間見える。

近年発行された書籍に光を当て、工藤正一『詩集 ある北方的な風景 復刻版』と坂本文雄・坂本文範『坂本文雄歌集『菜の競り』拾遺一付、弘前アララギ会の黎明一』を紹介。工藤正一は夭折の詩人として知られ、『詩集 ある北方的な風景』は正一の死後に工藤紫郎、三上斎太郎ら友人たちによって刊行された。『坂本文雄歌集『菜の競り』拾遺一付、弘前アララギ会の黎明一』は『歌集 菜の競り』(平成 5 年)に未収載の短歌、弘前アララギ会の黎明期を知ることの出来る貴重な一冊である。

開館 30 周年におけるスポット企画展を締めくくる展示に貴重な資料や情報を提供して下さった皆様、並びに新型コロナ感染防止にご協力いただいた来館者の皆様に、紙面を借りて感謝申し上げます。



工藤正一
『詩集 ある北方的な風景 復刻版』
オンデマンド出版 令和元年 11 月 1 日



坂本文雄・坂本文範
『坂本文雄歌集『菜の競り』拾遺一付、弘前アララギ会の黎明一』
令和 2 年 7 月 7 日

◇文学散歩 大鰐温泉せせらぎ編

講師: 櫛引 洋一(企画研究専門官)

~平川のせせらぎを聞きながら、文学作品の舞台となった大鰐温泉を巡る~

5 月 8 日、初夏の爽やかな気候の中、櫛引企画研究専門官の案内で、平川に架かる 6 つの橋を巡りながら大鰐温泉を散策し、作品の舞台となった場所では、作品の一節や俳句、短歌などの朗読・解説を聞いた。高浜虚子に「東北の俳壇の重鎮」と言われた俳人・増田手古奈(大鰐町)の医院跡の対岸では、手古奈邸での句会の様子を聞き、川のせせらぎも句作の材料となり得ると解説した。また、石坂洋次郎(弘前市)は大鰐温泉での思い出を「旧友 H 君」、「^{あわただ}遽しき帰郷記録」、「わが旅は終る」などの作品に登場させている。

終点のヤマニ仙遊館では、葛西善蔵、太宰治が宿泊した部屋や、善蔵の名前が記された宿帳なども特別に見せていただいた。善蔵は宿泊時(大正 11 年)、部屋からの様子を「この辺一帯に襲はれてみると云ふ毒蛾を捕へる大篝火が、対岸の河原に焚かれて、焰が紅く川波に映ってみた」と幻想的に描写した。大鰐温泉に絶えず流れる平川の「せせらぎ」は作家らを刺激し、参加者を文学の世界に誘った。



【大鰐が舞台の主な作品】

田山花袋『日本一周 後編』、島崎藤村書簡(明治 37 年 6 月 30 日、鳴海要吉宛)、高浜虚子俳句、小山正孝詩、大町桂月短歌、石坂洋次郎「教祖」、葛西善蔵「父の葬式」、佐藤紅緑「復讐」。



文学散歩の様子



ヤマニ仙遊館の宿帳

葛西善蔵の名前が見られる

◇ラウンジのひととき

— 俳句をうたう — 歌とお話し

出演: 木村 直美氏(声楽家)、鈴木 久巳子氏(伴奏)

木村さんは声楽家の他に俳人の顔を持ち、千空とも交流があった。千空との思い出話から始まった木村さんのラウンジのひととき。「俳句」に曲を付け歌にしたものは、いつもの「俳句」とは「異なる趣」のあるものだった。

川村昇一郎作曲の宮川翠雨、加藤楸邨の句や、奈良岡英樹作曲の赤間学が東日本大震災を詠んだ句集『福島 2017』より 3 曲、また千空と一緒に歌った思い出の曲「津軽のふるさと」などを歌いあげ、聴衆を俳句と歌の世界にいざなった。

12 月 4 日のラウンジのひとときも木村直美さんに出演いただく予定です。



「北の文脈文学講座」は 5 月~12 月 第 3 土曜日、「ラウンジのひととき」は 5 月~12 月 第 1 土曜日、ともに午後 2 時~3 時開催。

◇北の文脈文学講座

永住の地 五所川原と千空

講師: 齋藤 美穂 氏

(元「俳人・成田千空研究会」調査研究員)

俳句雑誌や個人句集への寄稿文を資料に、句作に対する千空の姿勢と五所川原での活動を中心に解説した。

千空は人間の在り様、作句態度、その方法、成果が^{ひとつ}一連なりであると考え、他人の評価に惑わされない、揺るぎない生き方を常に意識していた。同時に、句集を「地方の文化遺産」として考え、地方の俳人たちの句集出版に尽力した。無名の俳人たちの資料を後続の世代に伝え、やがては地方俳句が研究されることを願っていたのである。